

女子高校生の「体言止め」に見る 発話の受け継ぎと会話の構造

高岸 美代子

1. はじめに

本研究は長年教育現場にいて、常々感じていた日本の女子高校生のコミュニケーションへの関心に端を発したものである。彼女達の集団はいつも華やかで、会話も盛り上がりそうに見えるが、外部の者には、会話の内容は不明、言葉の断片しか理解できない。この傾向は年々ひどくなり、「宇宙人の会話」と呼ばれるようにさえなっている。

そこで、親しい友人関係にある女子高校生の会話データを文字に起こし、全発話の文末表現を集計した結果、「体言止め」が最も多く使用されていることがわかった。文脈判断が要求される「体言止め」コミュニケーションにおいて、彼女達はどのように発話を受け継ぎ、その際の会話の構造はどのようになっているのだろうか。

若い世代による言語の革新は言葉のシステム全体に影響する(高山 1994)といわれているが、日本語会話の構造の変化は日本語学習者にも大きな影響を及ぼすことにもなる。

2. 先行研究

「体言止め」に関しては、増田(2003)の性差からみた雑誌の「体言止め」や轟(2007)の近年ニュース番組で頻出している「体言止め」に関する警告等、メディアに関してのものがある。また、最近大学生の論文に「体言止め」が多く、問題になっているという研究結果もあるが、コミュニケーションの観点から話し言葉の文末表現としての「体言止め」を採りあげた研究は管見の限り見当たらない。

女子高校生のコミュニケーションに関しては、小林(1995)「文末形式に見る女子高校生の会話管理」があるが、2人の対話ではなく、6名のグループ会話ということもあり、本研究の予備調査で頻出した体言止め、動詞、形容詞の終止形、「た」「だ」等の言い切り表現は少ないという結果が出ている。

3. 研究目的及び研究課題

女子高校生の日常会話から日本語母語話者の会話構造の変化を示唆することを目的とする。

また、本研究では、予備調査結果をもとに、「体言止め」からコミュニケーションのあり方を探るべく下記の研究課題を設定した。

研究課題 I

- 1 「体言止め」発話のターン交替形式別使用頻度はどのようになっているか。
- 2 「体言止め」発話は直前の発話をどのように受け、直後の会話にどのように継がれているか。

研究課題 II

「体言止め」発話の受け継ぎは、会話の構造にどのように影響しているか。

4. 研究方法

4.1 データ

本研究の対象とするデータは、2008 年 7 月～9 月に某県立高校で収集した会話資料を使用した。女子高校生 15 組の親しい友人同士の自由会話を録音したものである。

尚、対照資料として、2008 年 9 月～12 月に収集した 40～60 代の日本語教師、高校教師、主婦等成人女性 7 組の自由会話データも使用している。

4.2 分析の枠組み

会話の受け継ぎを分析するための枠組みとして、大浜(2006)のターン交替形式を援用した。本研究では、「体言止め」という視点からの研究であること、二人の会話であること等を考慮して、大浜(2006)に見られる 7 つのタイプ別分類の内、相手の話を受けて、展開させるものは「文完成」「先取り相づち」として「取得放棄」に分類し、「割り込み」を選択肢から除外して、以下の 6 つにタイプ別分類した。

(1) 自己選択

それまでの聞き手であった会話者が、自ら話し手として自発的に申し出るもの

(2) 他者選択

会話の相手から自発的にターンを譲渡されるもので、相手の質問に答えるという場合がその典型例になる。

(3) 取得放棄

会話の相手からターン交替を示唆されたが、しようと思えばできた自己選択をしなかった。「体言止め」の場合は、オーム返し、相手の発話の一部の繰り返し表現、先取り相づち的表現になる。但し、上昇イントネーションを伴うものは、ポリ・ザトラウスキー(1993)により、確認要求として自己選択に分類した。

(4) 再保持

会話相手の取得放棄の後で、現在の話し手が再びターンを保持することで、結果的には現在の話し手がそのまま自分の話を続けることになる。

(5) 取得再放棄

取得放棄の後に再保持や自己選択が選択されなかった場合で、取得再放棄は2回以上続く場合も少なくない。この場合、現在の話し手がそのまま自分の話を続けることになる。

(6) 最終自己選択

取得再放棄の後に会話者のいずれかによりターンの取得が行われた場合を最終自己選択とする。

4.3 分析方法

15 分～20 分の録音した会話データを文字起こして、発話末の「体言止め」を抽出し、ターン交替形式に分類した。尚、本研究では、発話末に位置し、ターン交替に寄与するもののみを「体言止め」として採用した。前述した6種類のターン交替形式に分類した後、前後の相手発話も同じ方法で分類して、受け継ぎ表を作成した。

また、取得権の観点から、会話の構造にもたらす「体言止め」の影響を調べた。

「体言止め」を文種別に見ると、文法的に①名詞一語文、②言いさし文、③倒置文と3種類ある。

①名詞一語文には、「困っていること」のような連体修飾句も含まれる。②言いさし文は「どの学校にもありますが、文化祭」のような中途終了文で、③倒置文には「去年蹴られたもん、あたし」が会話例としてあげられる。文種別に使用頻度を調べ、受け

継ぎ表を作成した。

5. 結果と考察

5.1 「体言止め」使用頻度

表 1 ターン交替形式別使用頻度 (%)

	女子高校生	成人女性
自己選択	44.6	53
他者選択	12.9	10.6
取得放棄	9.6	3
再保持	22.2	33.3
取得再放棄	3.3	0
最終自己選択	3.9	0

上の表では、左が女子高校生、右が成人女性になっている。女子高校生、成人女性ともに自己選択が最も高い割合を示す。使用頻度における女子高校生の特徴は、取得放棄、取得再放棄、最終自己選択に表れている。「体言止め」の場合、取得放棄、取得再放棄は繰り返し表現になる。取得放棄 32 例、取得再放棄 11 例の内、それぞれ 27 例 (84.3%)、9 例 (81.8%)が名詞一語文での繰り返し表現である。最終自己選択は、あいづち的発話で譲り合い後の「体言止め」発話になる。

文種別では、全体を通して女子高校生の場合、名詞一語文での「体言止め」が成人女性の 37.9%に比して、62.3%と多くなっている。ちなみに成人女性の場合は、言いさし文が 53.0%と最も多くなっている。

5.2 「体言止め」の受け継ぎ

表 2 体言止め発話の受け継ぎ

	自選	他選	放棄	再保	再放	最自
自選	80(69)	21(54)	(21)	39		2
他選	31(27)		(15)	12		
放棄	8	5		17(25)	(6)	
再保	(32)	(8)	74(34)			
再放			8		3(3)	(8)
最自	(7)	(2)	(4)		13	
冒頭	(1)		(2)			

上の表は、「体言止め」の受け継ぎを表にしたものである。自選は「自己選択」、他選は「他者選択」、放棄は「取得放棄」、再保は「再保持」、再放は「取得再放棄」、最自は「最終自己選択」、冒頭は会話全体の冒頭部にあたる。また、縦軸は「体言止め」発話、横軸は相手発話である。「体言止め」の受け継ぎが数字で比較できるように同じ表で示した。継ぎの数は、() で示している。例えば、表中の31(27)は、前発話の自己選択を「体言止め」の他者選択で受けたのが31例、「体言止め」の他者選択の後発話の自己選択で継いだのが27例ということになる。

ここでは、①自選-自選 80(69)、②自選-他選 21(54)、他選-自選 31(27) ③再保-放棄 74(34)、放棄-再保 17(25)に注目したい。

①自選-自選は、「体言止め」の場合、自己選択を自己選択で受ける型、自己選択で継ぐ型、どちらも最も多くなっていることがわかる。これは、再保-自選(32)と同じく、話し手、聞き手役割はなく、どちらも話し手役割で相互に自発的に発話する型になる。連想ゲーム的、しりとり式会話になる。

②自選-他選、他選-自選は、前者の自選-他選は、「体言止め」の自己選択を他者選択で継いだのが54例ということであり、後者の他選-自選31(27)から考察すると、自己選択を「体言止め」の他者選択で受けたのが31例ということであるから、前者が後者の1.7倍に増加していることになる。これは、問いかけ-応答型発話になることから、ここでも「体言止め」発話は積極的に相手に話しかける話し手主導の発話になることがわかる。「体言止め」の自己選択の内、44.4%は、名詞一語文での上昇イントネーションによる問いかけであった。

【会話例1】＝保健体育のテストの点数の話＝

4-27 K	ちなみに 私は何点だったでしょう	(自己選択)
4-28 O	よかった?	(自己選択)
4-29 K	ん：微妙	(他者選択)
4-30 O	6 0	(自己選択)
4-31 K	ううん	(他者選択)
4-32 O	上↑ 下?	(自己選択)
4-33 K	上	(他者選択)
4-34 O	7 0	(自己選択)
4-35 K	近い	(他者選択)

4-36 O	7 3	(自己選択)
4-37 K	近い	(他者選択)
4-38 O	7 5	(自己選択)
4-39 K	8 0	(他者選択)
4-40 O	近くね：だろ	(自己選択)

ところが、自己選択、再保持での「体言止め」による問いかけは、相手に表現意図が伝わらない場合もあり、言い直しや聞き返しが見られたが、未解決のまま終わった例もある。

③再保-放棄、放棄-再保は、前発話取得放棄したものを「体言止め」で再保持したのが74例であるのに対し、「体言止め」を取得放棄したのは34例と大幅に減っている。これに比して、後者の放棄-再保は、再保持された前発話68例の内、「体言止め」で取得放棄したのが17例、「体言止め」で自己選択されたものが39例、「体言止め」で他者選択されたものが12例となっている。水谷(1993)のいわゆる伝統的な日本語会話の共話構造であれば、再保持された前発話68例は、取得放棄される、つまり、あいづち会話になるところである。この場合、25%しかあいづち会話になっていないことがわかる。このことから「体言止め」になると、あいづち会話が減少することがわかる。確かに、成人女性の場合、「体言止め」での取得放棄は2例しかみられず、いわゆるあいづちが使用され、話し手、聞き手役割の明確な共話構造になっていた。

5.3 「体言止め」と会話構造

話し手役割と聞き手役割が明確な日本語会話を共話型とし、話し手、聞き手双方が発話権を取得し合って、交互に入れ替わる会話を交互型、話し手、聞き手共に発話権を行使しない消極的な会話を譲り合い型とすると、「体言止め」の会話の構造はどのようになるのだろうか。

下のグラフは、先の受け継ぎ表をもとに会話の構造の推移を表したものである。

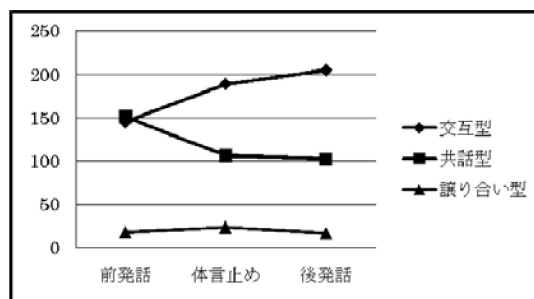


図1 会話構造の推移

– 101 –